

2024 年度（令和 6 年度）第 2 回バス共創プラットフォーム 会議録（要旨）

1 日 時

2024 年（令和 6 年）9 月 10 日（火）10：00～12：00

2 場 所

iti SETOUCHI tovio 福山市西町一丁目 1－1

3 出席者

(1) 委員（15 名）

神田佑亮委員、鈴木春菜委員、大畑友紀委員、宇田雅英委員、神原昌弘委員、石川亮委員（代理 新谷大）、富田直也委員、山口晃弘委員、河上正次委員、小野裕之委員、佐野公章委員、速水優一委員、丸石圭一委員、行迫孝治委員、難波和通委員

(2) 事務局（6 名）

(3) 傍聴者（7 名）

(4) 随行者（3 名）

4 会議の成立

委員 18 名中、代理出席を含め 15 名出席で、委員の過半数が出席しているため、バス共創プラットフォーム設置要綱第 6 条第 2 項の規定により会議が成立。

5 内容

(1) 議事

ア 委員名簿について

(2) 説明内容

ア 第 1 回のふりかえり

イ だれもが使いやすく、安心して移動ができる公共交通網（バス交通等）の実現のため

ウ 取組内容

(3) 意見交換

6 資料

- ・ 次第
- ・ 委員名簿
- ・ 資料 1 第 2 回バス共創プラットフォーム資料

7 協議内容

(1) 開会

(2) 議事

ア 委員名簿について

- ・ 会長から大畑友紀委員の追加について説明を行った。

(3) 説明内容

ア 第 1 回のふりかえり

イ だれもが使いやすく、安心して移動ができる公共交通網（バス交通等）の実現のため

ウ 取組内容

- ・ 事務局から資料 1 の説明を行った。

(4) 意見交換

ア 公共交通体系を軸としたまちづくり

- ・ コンパクトプラスネットワークの話は以前からあるが具体的に進めるのが難しいと認識している。要は選択と集中であり、どこを守っていくかという議論が必要。
- ・ 幹線（バス）をどの程度まで強くするのかという視点は持つておく必要がある。便数を増やすなどもう少し厚みを持たせたほうがいいのかもかもしれない。
- ・ 居住地や普段の行動がどう変わったかなど、人の活動の分析が必要。
- ・ 乗継拠点の位置や幹線（バス）の運行内容が現状のままでよいか分析が必要。
- ・ 鉄道との接続から乗継拠点の位置を考えることも必要。
- ・ 路線バスを福山駅に集約させることによって非効率になることもある。
- ・ 路線バスの直通がよいのか、鉄道と乗り継ぐのがよいのか、様々な方法を試してみる価値はある。
- ・ 区画整理などで新たな市街地が形成されているが、バス路線のルート見直しが行われていない。今のまちの形にどう合わせていくのか議論が必要。
- ・ 新興住宅街などは若い人が多く、若い人たちは車を使えるのでバス利用は増えないのではないかという懸念もあり、ルート見直しには慎重になっている。

- ・通常、需要が減ると便数が減るが、需要は減っているがあえて便数を残すことで、まちの活力を維持させるという考え方もある。
- ・まず何かを始めてみて、市民に変わっている様子を見せていき、どのような反応が起こるか確かめることも重要。
- ・移動は大きく分けて通勤通学時とレジャー時の2パターンがある。誰をターゲットにするかは取組の目的と一緒に考え、狙ったターゲットからしっかりとアンケートを取る必要がある。
- ・福山市で人口が増えているのは鉄道の沿線地域になっている。路線バスの軸をはっきりさせることで人口が増える地域を増やすことができる。
- ・路線バスが便利だから路線バス沿線に住みたいと思える人が出てくるとよい。
- ・高齢者や障がい者は、目的地に停まるバスがわからないなど、バス利用に対する不安が大きい。その不安をどう解消するかが課題。
- ・便を限定して、介助スタッフを乗車させることで安心して利用できるのではないかな。みんなで支えていくことが大事。
- ・最終的には若い人が当たり前で公共交通で移動する社会をめざしていくのがよい。

イ 運賃無料デー（案）

- ・実施期間が1週間なので、様々な人が幅広く参加できる内容である。
- ・1週間続けて実施した事例は、全国でもないため話題性がある。
- ・他市町と跨る路線の取扱いについて検討する必要がある。
- ・他市では運賃無料デーによって駅前の商業施設の売上が上がっている。
- ・バス以外の交通機関（タクシー、鉄道）の利用者数も確認が必要。
- ・市民の行動変容は調査が必要。移動手段が変わったのか、移動回数が増えたのかを把握することが大事。
- ・運賃無料デーは1回で終わるのでなく、継続して実施することが重要。路線やターゲットを限定して試すこともよい。
- ・他の公共交通（乗合タクシーや鉄道）も運賃無料デーの対象とすることで、幅広い交通手段でカバーしていくことができる。
- ・バスに興味を持ってもらえる大きなきっかけになる。運賃無料デーの目的や考え方をしっかりと整理し、一定の仮説を持って取り組む必要がある。
- ・どう変われば行動変容を促すことができるかをアンケートで集めるとよい。
- ・乗車、降車場所等、今後の施策に必要なデータを収集することも必要。アンケートも限界があり、データを収集する工夫が必要。
- ・アナログではあるが、整理券を必ず取ってもらうことで乗車地は特定できる。

- ・プラットフォーム委員の各組織・団体でデータ収集にも協力することで、多角的なデータを集めることが必要。
- ・運賃無料デーの利用者が日常の利用につながるかは疑問。
- ・平日の通勤通学時間帯は、積み残しが生じる恐れがある。
- ・定期利用者は無料の恩恵が受けられない。
- ・運賃が無料はインパクトが強いが、通常時とギャップがあると通常利用につながらないのではないか。
- ・岡山市の無料デーは、路線を限定した上限運賃の設定やイベントとの連携（商業施設のオープン、公共空間の活用、ファジアーノの試合等）することで公共交通を使ってまちなかへ行くという大きな動きを生み出していた。
- ・他市町の無料デーの事例を見ると、アンケート回収率が低い。どれだけ多くの声を集め、行動を把握するかが重要なので工夫が必要。
- ・運賃無料デーと合わせて実施したい取組があれば、可能な限り実施していくとよい。